

李陵（中島敦）

一

漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉・李陵は歩卒五千を率い、辺塞遮虜鄣を發して北へ向かった。阿爾泰山脈の東南端が戈壁沙漠に没せんとする辺の磽确たる丘陵地帯を縫って北行すること三十日。朔風は戎衣を吹いて寒く、いかにも万里孤軍來たるの感が深い。漠北・浚稽山の麓に至って軍はようやく止營した。すでに敵匈奴の勢力圏に深く進み入っているのである。秋とはいっても北地のこととて、苜蓿も枯れ、榆や檉柳の葉もはや落ちつくしている。木の葉どころか、木そのもののさえ（宿營地の近傍を除いては）、容易に見つからないほどの、ただ砂と岩と磧と、水のない河床との荒涼たる風景であった。極目人煙を見ず、まれに訪れるものとは曠野に水を求める羚羊ぐらいのものである。突兀と秋空を劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、將卒一同誰一人として甘い懷郷の情などに唆られるものはない。それほどに、彼らの位置は危険極まるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向かつて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり（馬に跨がる者は、陵とその幕僚数人にすぎなかった）で奥地深く侵入することからして、無謀の極みというほかはない。その歩兵も僅か五千、絶えて後援はなく、しかもこの浚稽山は、最も近い漢塞の居延からでも優に一千五百里（支那里程）は離れている。統率者李陵への絶対的な

信頼と心服とがなかったならとうてい続けられるような行軍ではなかった。

毎年秋風が立ちはじめると決つて漢の北辺には、胡馬に鞭うった剽悍な侵略者の大部隊が現われる。辺吏が殺され、人民が掠められ、家畜が奪略される。五原・朔方・雲中・上谷・雁門などが、その例年の被害地である。大將軍衛青・嫖騎將軍霍去病の武略によつて一時漠南に王庭なしといわれた元狩以後元鼎へかけての数年を除いては、ここ三十年來欠かすことなくこうした北辺の災いがつづいていた。霍去病が死んでから十八年、衛青が歿してから七年。浞野侯趙破奴は全軍を率いて虜に降り、光祿勳徐自為の朔北に築いた城障もたちまち破壊される。全軍の信頼を繋ぐに足る將帥としては、わずかに先年大宛を遠征して武名を挙げた貳師將軍李広利があるにすぎない。

その年——天漢二年夏五月、——匈奴の侵略に先立つて、貳師將軍が三萬騎に將として酒泉を出た。しきりに西辺を窺う匈奴の右賢王を天山に撃とうというのである。武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重のことに当たらせようとした。未央宮の武台殿に召見された李陵は、しかし、極力その役を免ぜられんことを請うた。陵は、飛將軍と呼ばれた名將李広の孫。

つとに祖父の風ありといわれた騎射の名手で、数年前から騎都尉として西辺の酒泉・張掖に在って射を教え兵を練っていたのである。年齢もようやく四十に近い血氣盛りとあつては、輜重の役はあまりに情けなかったに違いない。臣が辺境に養うところの兵は皆荊楚の一騎当千の勇士なれば、願わくは彼らの一隊を率いて討つて出で、側面から匈奴の軍を牽制

したいという陵の嘆願には、武帝も頷くところがあった。しかし、相つづく諸方への派兵のために、あいにく、陵の軍に割くべき騎馬の余力がないのである。李陵はそれでも構わぬといった。確かに無理とは思われたが、輜重の役などに当てられるよりは、むしろ己のために身命を惜しまぬ部下五千ともに危うきを冒すほうを選びたかったのである。臣願わくは少をもつて衆を撃たんとした陵の言葉を、派手好きな武帝は大いに欣んで、その願いを容れた。李陵は西、張掖に戻って部下の兵を勒するとすぐに北へ向けて進発した。当時居延に屯していた彊弩都尉路博德が詔を受けて、陵の軍を中道まで迎えに出る。そこまではよかったのだが、それから先がすこぶる拙いことになってきた。元来この路博德という男は古くから霍去病の部下として軍に従い、祁離侯にまで封ぜられ、ことに十二年前には伏波將軍として十万の兵を率いて南越を滅ぼした老将である。その後、法に坐して侯を失い現在の地位に墮されて西辺を守っている。年齢からいっても、李陵とは父子ほどに違う。かつては封侯をも得たその老将がいまさら若い李陵ごときの後塵を拝するのがなんとしても不愉快だったのである。彼は陵の軍を迎えると同時に、都へ使いをやつて奏上させた。今まさに秋として匈奴の馬は肥え、寡兵をもつてしては、騎馬戦を得意とする彼らの鋭鋒には些か当たりがたい。それゆえ、李陵とともにここに越年し、春を待つてから、酒泉・張掖の騎各五千をもって出撃したほうが得策と信ずるという上奏文である。もちろん、李陵はこのことをしらない。武帝はこれを見ると酷く怒った。李陵が博德と相談の上での上書と考えたのである。わが前ではあのとおり広言

しておきながら、いまさら辺地に行つて急に怯気づくとは何事ぞという。たちまち使いが都から博德と陵の所に飛ぶ。李陵は少をもつて衆を撃たんとわが前で広言したゆえ、汝はこれと協力する必要はない。今匈奴が西河に侵入したとあれば、汝はさっそく陵を残して西河に馳せつけ敵の道を遮れ、というのが博德への詔である。李陵への詔には、ただちに漠北に至り東は浚稽山から南は竜勒水の辺までを偵察觀望し、もし異状なくんば、浞野侯の故道に従つて受降城に至つて士を休めよとある。博德と相談してのあの上書はといったに難たることぞ、という烈しい詰問のあったことは言うまでもない。寡兵をもつて敵地に徘徊することの危険を別としても、なお、指定されたこの数千里の行程は、騎馬を持たぬ軍隊にとつてははなはだむずかしいものである。徒歩のみによる行軍の速度と、人力による車の牽引力と、冬へかけての胡地の氣候とを考えれば、これは誰にも明らかであった。武帝はけつして庸王ではなかったが、同じく庸王ではなかった隋の煬帝や始皇帝などと共通した長所と短所とを有っていた。愛寵比なき李夫人の兄たる貳師將軍にしてからが兵力不足のためいったん、大宛から引揚げようとして帝の逆鱗にふれ、玉門関をとじられてしまった。その大宛征討も、ただか善馬がほしいからと思ひ立たれたものであった。帝が一度言出したら、どんな我儘でも絶対に通されねばならぬ。まして、李陵の場合は、もともと自ら乞うた役割でさえある。(ただ季節と距離とに相当な注文があるだけで)躊躇すべき理由はどこにもない。彼は、かくて、「騎兵を伴わぬ北征」に出たのであった。

浚稽山の山間には十日余留まった。その間、日ごとに斥候を遠く派して敵状を探ったのはもちろん、附近の山川地形を剽すところなく図に写しとって都へ報告しなければならなかった。報告書は麾下の陳歩楽という者が身に帯びて、単身都へ馳せるのである。選ばれた使者は、李陵に一揖してから、十頭に足らぬ少数の馬の中の一匹に打跨ると、一鞭あてて丘を駈下りた。灰色に乾いた漠々たる風景の中に、その姿がしだいに小さくなっていくのを、一軍の将士は何か心細い気持ちで見送った。

十日の間、浚稽山の東西三十里の中には一人の胡兵をも見なかった。

彼らに先だって夏のうちに天山へと出撃した貳師將軍はいったん右賢王を破りながら、その帰途別の匈奴の大軍に囲まれて惨敗した。漢兵は十に六、七を討たれ、將軍の一身さえ危うかったという。その噂は彼らの耳にも届いている。李広利を破ったその敵の主力が今どのあたりにいるのか？ 今、因杆將軍公孫敖が西河・朔方の辺で禦いでいる（陵と手を分かった路博徳はその応援に馳せつけて行ったのだが）という敵軍は、どうも、距離と時間とを計ってみるに、問題の敵の主力ではなさそうに思われる。天山から、そんなに早く、東方四千里の河南（オルドス）の地まで行けるはずがないからである。どうしても匈奴の主力は現在、陵の軍の止营地から北方鄧居水までの間あたりに屯していなければならない勘定になる。李陵自身毎日前山の頂に立って四方を眺めるのだが、東方から南へかけてはただ漠々たる一面の平沙、西から北へか

けては樹木に乏しい丘陵性の山々が連なっているばかり、秋雲の間にときとして鷹か隼かと思われる鳥の影を見ることがあっても、地上には一騎の胡兵をも見ないのである。

山峡の疎林の外れに兵車を並べて囲い、その中に帷幕を連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下がった。士卒は乏しい木々を折取って焚いては暖をとった。十日もいるうちに月はなくなくなった。空気の乾いているせいか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれすれに、夜ごと、狼星が、青白い光芒を斜めに曳いて輝いていた。十数日事なく過ごしたのち、明日はいよいよここを立退いて、指定された進路を東南へ向かって取ろうと決めたその晩である。一人の歩哨が見るともなくこの爛々たる狼星を見上げてみると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大きい赤黄色い星が現われた。オヤと思っっているうちに、その見なれぬ巨きな星が赤く太い尾を引いて動いた。と続いて、二つ三つ四つ五つ、同じような光がその周囲に現われて、動いた。思わず歩哨が声を立てようとしたとき、それらの遠くの灯はフツと一時に消えた。まるで今見たことが夢だったかのように。

歩哨の報告に接した李陵は、全軍に命じて、明朝天明とともにただちに戦闘に入るべき準備を整えさせた。外に出て一応各部署を点検し終わると、ふたたび幕営に入り、雷のごとき鼙声を立てて熟睡した。

翌朝李陵が目を醒まして外へ出て見ると、全軍はすでに昨夜の命令どおりの陣形をとり、静かに敵を待ち構えていた。全部が、兵車を並べた外側に出、戟と盾とを持った者が前列に、弓弩を手にした者が後列にと配置されているのである。

この谷を挟んだ二つの山はまだ暁暗の中に森閑とはしているが、そここの巖陰に何かのひそんでいるらしい気配がなんとなく感じられる。

朝日の影が谷合にさしこんでくると同時に、(匈奴は、単于がまず朝日を拝したのちでなければ事を発しないのである。う。今まで何一つ見えなかった両山の頂から斜面にかけて、無数の人影が一時に湧いた。天地を撼がす喊声とともに胡兵は山下に殺到した。胡兵の先登が二十歩の距離に迫ったとき、それまで鳴りをしずめていた漢の陣営からはじめて鼓声が響く。たちまち千弩ともに発し、弦に应じて数百の胡兵はいっせいに倒れた。間髪を入れず、浮足立った残りの胡兵に向かつて、漢軍前列の持戟者らが襲いかかる。匈奴の軍は完全に潰えて、山上へ逃げ上った。漢軍これを追撃して虜首を挙げる。こと数千。

鮮やかな勝ちっぷりではあったが、執念深い敵がこのままで退くことはけっしてない。今日の敵軍だけでも優に三万はあったろう。それに、山上に靡いていた旗印から見れば、紛れもなく単于の親衛軍である。単于がいるものとすれば、八万や十万の後詰めの軍は当然繰出されるものと覚悟せねばならぬ。李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里の受降城へという前日までの予定を変えて、半月前に辿って来たその同じ道を南へ取って一日も早くもとの居延塞(それとて千数百里離れているが)に入ろうとしたのである。

南行三日めの午、漢軍の後方はるか北の地平線に、雲のごとく黄塵の揚がるのが見られた。匈奴騎兵の追撃である。翌

日はすでに八万の胡兵が騎馬の快速を利して、漢軍の前後左右を隙もなく取囲んでしまっていた。ただし、前日の失敗に懲りたとみえ、至近の距離にまでは近づいて来ない。南へ行進して行く漢軍を遠巻きにしながら、馬上から遠矢を射かけるのである。李陵が全軍を停めて、戦闘の体形をとらせれば、敵は馬を駆って遠く退き、搏戦を避ける。ふたたび行軍をはじめれば、また近づいて来て矢を射かける。行進の速度が著しく減ずるのはもとより、死傷者も一日ずつ確実に殖えていくのである。飢え疲れた旅人の後をつける曠野の狼のように、匈奴の兵はこの戦法を続けつつ執念深く追って来る。少しずつ傷つけていった揚句、いつかは最後の止めを刺そうとその機会を窺っているのである。

かつ戦い、かつ退きつつ南行することさらに数日、ある山谷の中で漢軍は一日の休養をとった。負傷者もすでにかなりの数に上っている。李陵は全員を点呼して、被害状況を調べたのち、傷のつか所(ところ)にすぎぬ者には平生どおり兵器を執って闘わしめ、両創を蒙る者にもなお兵車を助け推さしめ、三創にしてはじめて輦に乗せて扶け運ぶことに決めた。輸送力の欠乏から屍体はすべて曠野に遺棄するほかはなかったのである。この夜、陣中視察のとき、李陵はたまたまある輜重車中に男の服を纏うた女を発見した。全軍の車輛について一々調べたところ、同様にしてひそんでいた十数人の女が捜し出された。往年関東の群盗が一時に戮に遇ったとき、その妻子等が逐われて西辺に遷り住んだ。それら寡婦のうち衣食に窮するままに、辺境守備兵の妻となり、あるいは彼らを華客とする娼婦となり果てた者が少なくない。兵車中に隠れてはるば

る漠北^{ばくほく}まで従い来たったのは、そういう連中である。李陵は軍吏に女らを斬^きるべくカンタンに命じた。彼女らを伴い来たった士卒については一言のふれるところもない。澗^{たに}間の凹^{おう}地に引出された女どもの疝^{かん}高^{たか}い号^{ごう}泣^ながしばらくつづいた後、突然それが夜の沈黙に呑^のまれたようにフツと消えていくのを、軍幕の中の将士一同は肅^{しゅく}然^{ぜん}たる思いで聞いた。

翌朝、久しぶりで肉薄来襲した敵を迎えて漢の全軍は思いきり快戦した。敵の遺棄屍^し体^{たい}三千余。連日の執拗^{しつよう}なゲリラ戦術に久しくいらだち屈していた士気が俄^にかに奮^{ふる}い立った形である。次の日からまた、もとの竜^{りゅう}城^{じょう}の道に循^{したが}って、南方への退行が始まる。匈奴^{きょうと}はまたしても、元の遠巻き戦術に還^{かえ}った。五日め、漢軍は、平沙^{へいさ}の中^{なか}にときに見出される沼沢^{しょうたく}地の一つに踏入った。水は半ば凍り、泥濘^{でいねい}も脛^{はざ}を没する深さで、行けども行けども果てしない枯葦^{かれあし}原^{はら}が続く。風上^{かざかみ}に廻^{まわ}った匈奴の一隊が火を放った。朔風^{さくふう}は焰^{ほのお}を煽^{あお}り、真昼の空の下に白っぽく輝きを失った火は、すさまじい速さで漢軍に迫る。李陵はすぐに附近の葦^{あし}に迎え火を放たしめて、かろうじてこれを防いだ。火は防いだが、沮洳^{そじょ}地の車行の困難は言語に絶した。休息の地のないままに一夜泥濘^{でいねい}の中を歩き通したのち、翌朝ようやく丘陵^{たど}地に辿りついたとたんに、先廻^{さきまわ}りして待伏せていた敵の主力の襲撃に遭^あった。人馬入乱れての搏兵^{はくへい}戦である。騎馬隊の烈^{はげ}しい突撃を避けるため、李陵は車を棄^すてて、山麓^{さんろく}の疎林^{そりん}の中に戦闘の場所を移し入れた。林間からの猛射はすこぶる効を奏した。たまたま陣頭^{れんとう}に姿を現わした单于^{ぜんう}とその親衛隊とに向かつて、一時に連弩^{れんどう}を発して乱射したとき、单于の白馬は前脚を高くあげて棒立ちとなり、青袍^{せいほう}をまどつ

た胡主^{こしゅ}はたちまち地上に投出された。親衛隊の二騎が馬から下りもせず、左右からさつと单于を掬^{すく}い上げると、全隊がたちまちこれの中に囲んですばやく退いて行った。乱闘数刻のちようやく執拗^{しつよう}な敵を撃退しえたが、確かに今までにない難戦であった。遺された敵の屍^し体^{たい}はまたしても数千を算したが、漢軍も千に近い戦死者を出したのである。

この日捕えた胡虜^{こりよ}の口から、敵軍の事情の一端を知ることができた。それによれば、单于^{ぜんう}は漢兵の手強^{てこわ}さに驚嘆し、己^{おのれ}に二十倍する大軍をも怯^{おそ}れず日に日に南下して我を誘うかに見えるのは、あるいはどこか近くに、伏兵があつて、それを恃^{たの}んでいるのではないかと疑っているらしい。前夜その疑いを单于が幹部の諸将に洩^もらして事を計ったところ、結局、そういう疑いも確かにありうるが、ともかくも、单于自ら数万騎を率いて漢の寡勢^{かせい}を滅しえぬとあつては、我々の面目に係わるといふ主戦論が勝ちを制し、これより南四、五十里は山谷がつづくがその間力戦猛攻し、さて平地に出て一戦してもなお破りえないとなつたそのときはじめて兵を北に還^{かえ}そうといふことに決まつたという。これを聞いて、校尉^{こうい}韓延年^{かんえんねん}以下漢軍の幕僚^{ばくりょう}たちの頭に、あるいは助かるかもしれぬぞという希望のようなものが微^{かす}かに湧^わいた。

翌日からの胡軍の攻撃は猛烈を極めた。捕虜^{ほりよ}の言の中にあつた最後の猛攻というのを始めたのであろう。襲撃は一日に十数回繰返された。手厳^{てきび}しい反撃を加えつつ漢軍は徐々に南に移って行く。三日経^たつと平地に出た。平地戦になると倍加される騎馬隊の威力にものを言わせ匈奴^{きょうと}らは遮^{しや}二無^{にむ}二漢軍を圧倒しようとかかったが、結局またも二千の屍^し体^{たい}を遺^{のこ}して退

いた。捕虜の言が偽りでなければ、これで胡軍は追撃を打切るはずである。たかが一兵卒の言った言葉ゆえ、それほど信頼できるとは思わなかったが、それでも幕僚一同些かホツとしたことは争えなかった。

その晩、漢の軍侯、管敢という者が陣を脱して匈奴の軍に亡げ降った。かつて長安都下の悪少年だった男だが、前夜斥候上の手ばかりについて校尉・成安侯韓延年のために衆人の前で面罵され、笞打された。それを含んでこの挙に出たのである。先日溪間で斬に遭った女どもの一人が彼の妻だったとも言う。管敢は匈奴の捕虜の自供した言葉を知っていた。それゆえ、胡陣に亡げて単于の前に引出されるや、伏兵を懼れて引上げる必要のないことを力説した。言う、漢軍には後援がない。矢もほとんど尽きようとしている。負傷者も続出して行軍は難渋を極めている。漢軍の中心をなすものは、李將軍および成安侯韓延年の率いる各八百人だが、それぞれ黄と白との幟をもつて印としてゐるゆえ、明日胡騎の精鋭をしてそこに攻撃を集中せしめてこれを破ったなら、他は容易に潰滅するであろう、云々。単于は大いに喜んで厚く敢を遇し、ただちに北方への引上げ命令を取消した。

翌日、李陵韓延年速かに降れと疾呼しつつ、胡軍の最精鋭は、黄白の幟を目ざして襲いかかった。その勢いに漢軍は、しだいに平地から西方の山地へと押されて行く。ついに本道から遙かに離れた山谷の間に追込まれてしまった。四方の山上から敵は矢を雨のごとくに注いだ。それに応戦しようにも、今や矢が完全に尽きてしまった。遮虜鄣を出るとき各人が百本ずつ携えた五十万本の矢がごとごとく射尽くされたのである。

る。矢ばかりではない。全軍の刀槍矛戟の類も半ばは折れ欠けてしまった。文字どおり刀折れ矢尽きたのである。それでも、戟を失ったものは車輻を斬ってこれを持ち、軍吏は尺刀を手にして防戦した。谷は奥へ進むに従っていよいよ狭くなる。胡卒は諸所の崖の上から大石を投下しはじめた。矢よりもこのほうが確実に漢軍の死傷者を増加させた。死屍と礮石とでもはや前進も不可能になった。

その夜、李陵は小袖短衣の便衣を着け、誰もついて来るなと禁じて独り幕営の外に出た。月が山の峽から覗いて谷間に堆い屍を照らした。浚稽山の陣を撤するときには夜が暗かつたのに、またも月が明るくなりはじめたのである。月光と満地の霜とで片岡の斜面は水に濡れたように見えた。幕営の中に残った将士は、李陵の服装からして、彼が単身敵陣を窺ってあわよくば単于と刺違える所存に違いないことを察した。李陵はなかなか戻って来なかった。彼らは息をひそめてしばらく外の様子を窺った。遠く山上の敵壘から胡笳の音が響く。かなり久しくたつてから、音もなく帷をかかげて李陵が幕の内にはいつて来た。だめだ。と一言吐き出すように言うと、踞牀に腰を下した。全軍斬死のほか、途はないようだなと、またしばらくしてから、誰に向かつてともなく言った。満座口を開く者はない。ややあって軍吏の一人が口を切り、先年浞野侯趙破奴が胡軍のために生擒られ、数年後に漢に亡げ帰ったときも、武帝はこれを罰しなかったことを語った。この例から考えても、寡兵をもって、かくまで匈奴を震駭させた李陵であつてみれば、たとえ都へのがれ帰っても、天子はこれを遇する途を知りたもうであろうというのである。李陵は

それを遮さへぎって言う。陵一個のことはしばらく措おけ、とにかく、今数十矢もあれば一応は囲みを脱出することもできようが、一本の矢もないこの有様ありさまでは、明日の天明には全軍が坐ざして縛ばくを受けるばかり。ただ、今夜のうちに囲みを突いて外に出、各自鳥獸と散じて走ったならば、その中にはあるいは辺塞へんさいに辿たどりついて、天子に軍状を報告しうる者もあるかもしれない。案ずるに現在の地点は鞬汗山ていかんざん北方の山地に違いなく、居延きょえんまではなお数日の行程ゆえ、成否のほどはおぼつかないが、ともかく今となつては、そのほかに残された途みちはないではないか。諸將僚もこれに領うなずいた。全軍の將卒に各二升の糒ほしいと一個の冰片ひょうぺんとが頒わかたれ、遮しや二無二、遮虜しやりよ鄣しやうに向かつて走るべき旨がふくめられた。さて、一方、ことごとく漢陣の旌旗せいきを倒しこれを斬きつて地中に埋めたのち、武器兵車等の敵に利用される懼おそれのあるものも皆打毀うちこわした。夜半、鼓こして兵を起こした。軍鼓ぐんこの音も慘さんとして響かぬ。李陵は韓校尉かんこういとともに馬に跨またがり壮士十余人を従えて先登せんとうに立った。この日追い込まれた峽谷きやうこくの東の口を破つて平地に出、それから南へ向けて走ろうというのである。

早い月はすでに落ちた。胡虜こりよの不意を衝ついて、ともかくも全軍の三分の二は予定どおり峽谷の裏口を突破した。しかしすぐに敵の騎馬兵の追撃に遭あった。徒歩の兵は大部分討たれあるいは捕えられたようだったが、混戦に乗じて敵の馬を奪った数十人は、その胡馬こばに鞭むちうって南方へ走った。敵の追撃をふり切つて夜目にもぼつと白い平沙へいさの上を、のがれ去った部下の数を数えて、確かに百に余ることを確かめうると、李陵りりようはまた峽谷の入口の修羅場しゅらばにとつて返した。身には数創を帯

び、自みづからの血と返り血とで、戎衣じゅういは重く濡ぬれていた。彼と並んでいた韓延年かんえんねんはすでに討たれて戦死していた。麾下きかを失い全軍を失つて、もはや天子に見まみすべき面目はない。彼は戟ほこを取直すと、ふたたび乱軍の中に駢入けいけいした。暗い中で敵味方も分らぬほどの乱闘のうちに、李陵の馬が流矢ながれやに当たったとみえてガックリ前にのめった。それとどちらが早かったか、前なる敵を突こうと戈ほこを引いた李陵は、突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰くつて失神した。馬から顛落てんらくした彼の上に、生擒いけんとろうと構えた胡兵こへいどもが十重二十重はたえとおり重なつて、とびかかった。

二

九月に北へ立った五千の漢軍かんぐんは、十一月にはいつて、疲れ傷ついて將を失つた四百足らずの敗兵となつて辺塞へんさいに辿たどりつた。敗報はただちに駅伝えきでんをもつて長安ちやうあんの都に達した。

武帝ふていは思ひのほか腹を立てなかつた。本軍たる李広利りこうりの大軍さえ惨敗さんぱいしているのに、一支隊たる李陵の寡軍かくんにたいした期待のもてよう道理がなかつたから。それに彼は、李陵が必ずや戦死しているに違ちがひないとも思つていたのである。ただ、先ごろ李陵の使いとして漠北ばくほくから「戦線異状なし、士気すこぶる旺盛」の報をもたらしした陳歩楽ちんぽらくだけは（彼は吉報の使者として嘉よせられ郎ろうとなつてそのまま都に留とどまつていた）成行上どうしても自殺しなければならなかつた。哀れではあつたが、これはやむを得ない。

翌、天漢三年の春になつて、李陵りりようは戦死したのではない。

捕えられて虜に降ったのだという確報が届いた。武帝ははじめて嚇怒した。即位後四十余年。帝はすでに六十に近かったが、氣象の烈しきは壮時に超えている。神仙の説を好み方士巫覡の類を信じた彼は、それまでに己の絶対に尊信する方士どもに幾度か欺かれていた。漢の勢威の絶頂に当たつて五十余年の間君臨したこの大皇帝は、その中年以後ずっと、靈魂の世界への不安な関心に執拗につきまとわれていた。それだけに、その方面での失望は彼にとって大きな打撃となつた。こうした打撃は、生来闊達だつた彼の心に、年とともに群臣への暗い猜疑を植えつけていった。李蔡・青霍・趙周と、丞相たる者は相ついで死罪に行なわれた。現在の丞相たる公孫賀のごとき、命を拝したときに己が運命を恐れて帝の前で手離して泣出したほどである。硬骨漢汲黯が退いた後は、帝を取巻くものは、佞臣にあらずんば酷吏であつた。

さて、武帝は諸重臣を召して李陵の処置について計つた。

李陵の身体は都にはないが、その罪の決定によつて、彼の妻子眷属家財などの処分が行なわれるのである。酷吏として聞こえた一廷尉が常に帝の顔色を窺い合法的に法を枉げて帝の意を迎えることに巧みであつた。ある人が法の權威を説いてこれを詰つたところ、これに答えていう。前主の是とすることころこれが律となり、後主の是とすることころこれが令となる。当時の君主の意のほかになんの法があろうぞと。群臣皆この廷尉の類であつた。丞相公孫賀、御史大夫杜周、太常、趙弟以下、誰一人として、帝の震怒を犯してまで陵のために弁じようとする者はない。口を極めて彼らは李陵の売国的行為を罵る。陵のごとき変節漢と肩を比べて朝に仕えていたこと

を思うといまさらながら愧ずかしいと言出した。平生の陵の行為の一つ一つがすべて疑わしかったことに意見が一致した。陵の従弟に当たる李敢が太子の寵を頼んで驕恣であることまでが、陵への誹謗の種子になった。口を緘して意見を洩らさぬ者が、結局陵に対して最大の好意を有つものだったが、それも数えるほどしかない。

ただ一人、苦々しい顔をしてこれらを見守っている男がいた。今口を極めて李陵を譏誣しているのは、数か月前李陵が都を辞するときに盃をあげて、その行を壮にした連中ではなかつたか。漠北からの使者が来て李陵の軍の健在を伝えたとき、さすがは名将李広の孫と李陵の孤軍奮闘を讃えたのもまた同じ連中ではないのか。恬として既往を忘れたふりのできる頭官連や、彼らの諂諛を見破るほどに聡明ではありながらなお真実に耳を傾けることを嫌う君主が、この男には不思議に思われた。いや、不思議ではない。人間がそういうものとは昔からいやになるほど知つてはいるのだが、それにしてもその不愉快さに変わりはないのである。下大夫の一人として朝につらなつていたために彼もまた下問を受けた。そのとき、この男はハッキリと李陵を褒め上げた。言う。陵の平生を見るに、親に事えて孝、士と交わつて信、常に奮つて身を顧みずもつて国家の急に殉ずるは誠に国士のふうありというべく、今不幸にして事一度破れたが、身を全うし妻子を保んずることをのみただ念願とする君側の佞人ばらが、この陵の一失を取上げてこれを誇大歪曲しもつて上の聡明を蔽おうとしているのは、遺憾この上もない。そもそも陵の今回の軍たる、五千にも満たぬ歩卒を率いて深く敵地に入り、匈奴

数万の師を奔命に疲れしめ、転戦千里、矢尽き道窮まるに至るもなお全軍空弩を張り、白刃を冒して死闘している。部下の心を得てこれに死力を尽くさしむること、古の名将といえどもこれには過ぎまい。軍敗れたりとはいえ、その善戦のあとにはまさに天下に顕彰するに足る。思うに、彼が死せずして虜に降ったというのも、ひそかにかの地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。……

並いる群臣は驚いた。こんなことのいえる男が世にいうとは考えなかったからである。彼らはこめかみを顛わせた武帝の顔を恐る恐る見上げた。それから、自分らをあえて全軀保妻子の臣と呼んだこの男を待つものが何であるかを考えて、ニヤリとするのである。

向こう見ずなその男——太史令・司馬遷が君前を退くと、すぐに、「全軀保妻子の臣」の一人が、遷と李陵との親しい関係について武帝の耳に入れた。太史令は故あつて弑師將軍と隙あり、遷が陵を褒めるのは、それによつて、今度、陵に先立つて出塞して功のなかった弑師將軍を陥れんがためであると言う者も出てきた。ともかくも、たかが星曆卜祀を司るにすぎぬ太史令の身として、あまりにも不遜な態度だというのが、一同の一致した意見である。おかしいことに、李陵の家族よりも司馬遷のほうが先に罪せられることになった。翌日、彼は廷尉に下された。刑は宮と決まった。

支那で昔から行なわれた肉刑の主なるものとして、黥、劓（はなきる）、剕（あしきる）、宮、の四つがある。武帝の祖父・文帝のとき、この四つのうち三つまでは廃せられたが、宮刑のみはそのまま残された。宮刑とはもちろん、男を男で

なくする奇怪な刑罰である。これを一に腐刑ともいうのは、その創が腐臭を放つがゆえだともいい、あるいは、腐木の実を生ぜざるがごとき男と成り果てるからだともいう。この刑を受けた者を閹人と称し、宮廷の宦官の大部分がこれであつたことは言うまでもない。人もあろうに司馬遷がこの刑に遭つたのである。しかし、後代の我々が史記の作者として知っている司馬遷は大きな名前だが、当時の太史令司馬遷は眇たる一文筆の吏にすぎない。頭脳の明晰なことは確かとしてもその頭脳に自信をもちすぎた、人づき合いの悪い男、議論においてけつして他人に負けない男、たかだか強情我慢の偏癡人としてしか知られていなかった。彼が腐刑に遇つたからとて別に驚く者はない。

司馬氏は元周の史官であつた。後、晋に入り、秦に仕え、漢の代となつてから四代目の司馬談が武帝に仕えて建元年間に太史令をつとめた。この談が遷の父である。専門たる律・曆・易のほかには道家の教に精しくまた博く儒、墨、法、名、諸家の説にも通じていたが、それらをすべて一家の見をもつて綜べて自己のものとしていた。己の頭脳や精神力についての自信の強さはそっくりそのまま息子に遷に受嗣がれたところのものである。彼が、息子に施した最大の教育は、諸学の伝授を終えてのちに、海内の大旅行をさせたことであつた。当時としては変わった教育法であつたが、これが後年の歴史家司馬遷に資するところのすこぶる大であつたことは、いうまでもない。

元封元年に武帝が東、泰山に登つて天を祭ったとき、たまたま周南で病床にあつた熱血漢司馬談は、天子始めて漢家の

封を建つるめでたきときに、己一人従つてゆくことのできぬのを慨き、憤を発してそのために死んだ。古今を一貫せる通史の編述こそは彼の一生の念願だったのだが、単に材料の蒐集のみで終わってしまったのである。その臨終の光景は息子・遷の筆によって詳しく史記の最後の章に描かれている。それによると司馬談は己のまた起ちがたきを知るや遷を呼びその手を執つて、懇ろに修史の必要を説き、己太史となりながらこのことに着手せず、賢君忠臣の事蹟を空しく地下に埋もれしめる不甲斐なさを慨いて泣いた。「予死せば汝必ず太史とならん。太史とならばわが論著せんと欲するところを忘るるなかれ」といい、これこそ己に対する孝の最大なものだとて、爾それ念えやと繰返したとき、遷は俯首流涕してその命に背かざるべきを誓つたのである。

父が死んでから二年ののち、はたして、司馬遷は太史令の職を継いだ。父の蒐集した資料と、宮廷所蔵の秘冊とを用いて、すぐにも父子相伝の天職にとりかかりたかったのだが、任官後の彼にまず課せられたのは暦の改正という事業であつた。この仕事に没頭することちやうど満四年。太初元年によろやくこれを仕上げると、すぐに彼は史記の編纂に着手した。遷、ときに年四十二。

腹案はとうにでき上がっていた。その腹案による史書の形式は従来の史書のどれにも似ていなかった。彼は道義的批判の規準を示すものとしては春秋を推したが、事実を伝える史書としてはなんとしてもあきたらなかつた。もっと事実が欲しい。教訓よりも事実が。左伝や国語になると、なるほど事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至つては感嘆のほかはな

い。しかし、その事実を作り上げる一人一人の人についての探求がない。事件の中における彼らの姿の描出は鮮やかであっても、そうしたことをしでかすまでに至る彼ら一人一人の身許調べの欠けているのが、司馬遷には不服だった。それに従来の史書はすべて、当代の者に既往をしらしめることが主眼となつていて、未来の者に当代を知らしめるためのものとしての用意があまりに欠けすぎているようである。要するに、司馬遷の欲するものは、在来の史には求めて得られなかつた。どういふ点で在来の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲するところを書上げてみてはじめて判然する底のものと思われた。彼の胸中にあるモヤモヤと鬱積したものを書き現わすことの要求のほうで、在来の史書に対する批判より先に立つた。いや、彼の批判は、自ら新しいものを創るという形でしか現われないのである。自分が長い間頭の中で画いてきた構想が、史といえるものか、彼には自信はなかつた。しかし、史といえてもいえなくても、とにかくそういうものが最も書かれなければならぬものだ（世人にとって、後代にとって、なかんずく己自身にとって）という点については、自信があつた。彼も孔子に倣つて、述べて作らぬ方針をとつたが、しかし、孔子のそれとはたぶん内容に異にした述而不作である、司馬遷にとつて、単なる編年体の事件列挙はいまだ「述べる」の中にはいらぬものだったし、また、後世人の事実そのものを知ることが妨げるような、あまりにも道義的な断案は、むしろ「作る」の部類にはいるように思われた。

漢が天下を定めてからすでに五代・百年、始皇帝の反文化政策によつて湮滅しあるいは隠匿されていた書物がようやく

世に行なわれはじめ、文の興おこらんとする氣運が鬱勃うつぱつとして感じられた。漢の朝廷ばかりでなく、時代が、史の出現を要求しているときであった。司馬遷しばせん個人としては、父の遺囑いしよくによる感激が学殖・觀察眼・筆力の充実を伴ってようやく渾然たるものを生み出すべく醺醺はっこんしかけてきていた。彼の仕事は実に氣持よく進んだ。むしろ快調に行きすぎて困るくらいであった。というのは、初めの五帝本紀から夏殷周秦本紀あたりまでは、彼も、材料を按排あんばいして記述の正確嚴密を期する一人の技師に過ぎなかったのだが、始皇帝を経て、項羽本紀にはいるころから、その技術家の冷靜さが怪しくなってきた。ともすれば、項羽が彼に、あるいは彼が項羽にのり移りかねないのである。

項王則すなわち夜起キテ帳中ニ飲ス。美人有り。名ハ虞。常ニ幸セラレテ従フ。駿馬名ハ騊駼しゅんめ、常ニ之ニ騎ス。是ニ於テ項王乃チ悲歌慷慨こうがいシ自ラ詩ヲ為リテ曰ク「力山ヲ拔キ氣世ヲ蓋フ、時利アラズ騅逝ゆカズ、騅逝カズ奈何スベキ、虞ヤ虞ヤ若ヲ奈何ニセン」ト。歌フコト数闋けつ、美人之ニ和ス。項王泣数行下ル。左右皆泣キ、能ク仰ギ視ルモノ莫シ……。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされたような書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであった。しかしなんと生氣澆刺はつせつたる述べ方であったか？ 異常な想像的視覚を有もった者でなければとうてい不能な記述であった。彼は、ときに「作ル」ことを恐れるのあまり、すでに書いた部分を読返してみ、それがあるがために史上の人物が現実の人物のごとくに躍動すると

思われる字句を削る。すると確かにその人物はハツラツたる呼吸を止める。これで、「作ル」ことになる心配はないわけである。しかし、（と司馬遷が思うに）これでは項羽が項羽でなくなるではないか。項羽も始皇帝も楚の莊王もみな同じ人間になってしまふ。違った人間を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？ 「述べる」とは、違った人間は違った人間として述べることではないか。そう考えてくると、やはり彼は削った字句をふたたび生かさなけいにはいれない。元どおりに直して、さて一読してみ、彼はやっと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲はんかいや范增はんぞうが、みんなようやく安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる。

調子のよいときの武帝は誠に高邁闊達こうまいくわんだつな・理解ある文教の保護者だったし、太史令たいしれいという職が地味な特殊な技能を要するものだったために、官界につきものの朋党比周ほうとうひしゅうの擠陷讒誣せいけんざんごによる地位（あるいは生命）の不安定からも免れることができた。

数年の間、司馬遷は充実した・幸福といつていい日々を送った。（当時の人間の考える幸福とは、現代人のそれと、ひどく内容の違うものだったが、それを求めることに変わりはない。）妥協性はなかったが、どこまでも陽性で、よく論じよく怒りよく笑いなかなか論敵を完膚かんぷなきまでに説破することをも得意としていた。

さて、そうした数年ののち、突然、この禍わざわいが降くだったのである。

薄暗い蚕室さんしつの中で——腐刑ふけい施術後当分の間は風に当たることを避けねばならぬので、中に火を熾おこして暖かに保った・密閉した暗室を作り、そこに施術後の受刑者を数日の間入れて、身体を養わせる。暖かく暗いところが蚕を飼う部屋に似ているとて、それを蚕室と名づけるのである。——言語を絶した混乱のあまり彼は茫然ぼうぜんと壁によりかかった。憤激ふんげきよりも先に、驚きのようなものさえ感じていた。斬に遭うこと、死を賜うことに對してなら、彼にはもとより平生から覚悟ができていた。刑死けいしする己の姿なら想像してみることでもあるし、武帝の氣に逆らって李陵を褒め上げたときもまかりまちがえば死を賜うようなことになるかもしれないの懸念けねんは自分にもあったのである。ところが、刑罰も数ある中で、よりによって最も醜陋しゅうろうな宮刑きやうけいにあおうとは！ 迂闊うかつといえは迂闊だが、（というのは、死刑を予期するくらいなら当然、他のあらゆる刑罰も予期しなければならぬわけだから）彼は自分の運命の中に、不測の死が待受けているかもしれないと考へていたけれども、このような醜いものが突然現われようとは、全然、頭から考へもしなかったのである。常々、彼は、人間にはそれぞれその人間にふさわしい事件しか起こらないのだという一種の確信のようなものを有もっていた。これは長い間史実を扱っているうちに自然に養われた考へであつた。同じ逆境にしても、慷慨こうがいの士には激しい痛烈な苦しみ、軟弱の徒とには緩慢なじめじめした醜い苦しみ、というふうにある。たとえ始めは一見ふさわしくないように見えても、少なくともその後の対処のし方によってその運命はその人間にふさわしいことが判わかってくるのだと。司馬遷しばせんは自分を男だと信じて

いた。文筆の吏りではあつても当代のいかなる武人ぶじんよりも男であることを確信していた。自分でばかりではない。このことだけは、いかに彼に好意を寄せぬ者でも認めないわけにはいかないようであつた。それゆゑ、彼は自らの持論に従つて、車裂くるまたきの刑なら自分の行く手に思い画えがくことができたのである。それが齡五十よひいに近い身で、この辱はづかしめにあおうとは！ 彼は、今自分が蚕室さんしつの中にいるということが夢のような気がした。夢だと思ひたかつた。しかし、壁によって閉じていた目を開くと、うす暗い中に、生気のない・魂までが抜けたような顔をした男が三、四人、だらしなく横たわつたりすわつたりしているのが目にはいつた。あの姿が、つまり今の己なのだと思つたとき、嗚咽おえつとも怒号どごうともつかない叫びが彼の咽喉のどを破つた。

痛憤はんもんと煩悶はんもんとの数日のうちには、ときに、学者としての彼の習慣からくる思索が——反省が來た。いつたい、今度の出來事の中で、何が——誰が——誰のどうところが、悪かつたのだという考へである。日本の君臣道とは根柢こんていから異なつた彼の國のこととて、当然、彼はまず、武帝を怨うらんだ。一時はその怨懣えんまんだけで、いっさい他を顧みる余裕はなかつたというのが實際であつた。しかし、しばらくの狂乱の時期の過ぎたあとには、歴史家としての彼が、目覺めてきた。儒者じゆしゃと違つて、先王の価値にも歴史家的な割引をするのを知つていた彼は、後王たる武帝の評価の上にも、私怨しえんのために狂いを來たさせることはなかつた。なんといつても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動みどうだもしない。高祖はしばらく措おくとする

も、仁君文帝も名君景帝も、この君に比べれば、やはり小さい。ただ大きいものは、その欠点までが大きく写ってくるのは、これはやむを得ない。司馬遷は極度の憤怒のうちにあってもこのことを忘れてはいない。今度のことは要するに天の作せる疾風暴雨霹靂に見舞われたものと思うほかはないという考えが、彼をいっそう絶望的な憤りへと駆ったが、また一方、逆に諦観へも向かわせようとする。怨恨が長く君主に向かい得ないとなると、勢い、君側の姦臣に向けられる。彼らが悪い。たしかにそうだ。しかし、この悪さは、すこぶる副次的な悪さである。それに、自矜心の高い彼にとつて、彼ら小人輩は、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。彼は、今度ほど好人物というものの腹立ちを感じたことはない。これは姦臣や酷吏よりも始末が悪い。少なくとも側から見ている腹が立つ。良心的に安っぽく安心しており、他にも安心させるだけ、いっそう怪しからぬのだ。弁護もしなければ反駁もせぬ。心中、反省もなければ自責もない。丞相公孫賀のごとき、その代表的なものだ。同じ阿諛迎合を事としても、杜周（最近この男は前任者王卿を陥れてまんまと御史大夫となりおおせた）のような奴は自らそれと知っているに違いがないが、このお人好しの丞相ときた日には、その自覚さえない。自分に全軀保妻子の臣といわれても、こういう手合いは、腹も立てないのだろう。こんな手合いは恨みを向けるだけの値打ちさえもない。

司馬遷は最後に忿懣の持って行きどころを自分に求めようとする。実際、何ものかに対して腹を立てなければならぬとすれば、結局それは自分自身に対してのほかはなかったのだ

ある。だが、自分のどこが悪かったのか？ 李陵のために弁じたこと、これはいかに考えてみてもまちがっていたとは思えない。方法的にも格別拙かったとは考えぬ。阿諛に墮するに甘んじないかぎり、あれはあれでどうしようもない。それでは、自ら顧みてやましくなければ、そのやましくない行為が、どのような結果を来たそうとも、士たる者はそれを甘受しなければならぬはずだ。なるほどそれは一応そうに違いない。だから自分も肢解されようと腰斬にあおうと、そういうものなら甘んじて受けるつもりなのだ。しかし、この宮刑は——その結果かく成り果てたわが身の有様というものは、——これはまた別だ。同じ不具でも足を切られたり鼻を切られたりするのとは全然違った種類のものだ。士たる者の加えられるべき刑ではない。こればかりは、身体のこういう状態というものは、どういう角度から見ても、完全な悪だ。飾言の余地はない。そうして、心の傷だけならば時とともに癒えることもあろうが、己が身体のこの醜惡な現実には死に至るまでつづくのだ。動機がどうあろうと、このような結果を招くものは、結局「悪かった」といわなければならぬ。しかし、どこが悪かった？ 己のどこが？ どこも悪くなかった。己は正しいことしかしなかった。強いていえば、ただ、「我あり」という事実だけが悪かったのである。

茫然とした虚脱の状態ですわっていたかと思うと、突然飛上り、傷ついた獣のごとくうめきながら暗く暖かい室の中を歩き廻る。そうしたしぐさを無意識に繰返しつつ、彼の考えもまた、いつも同じ所をぐるぐる廻ってばかりいて帰結するところを知らないのである。

我を忘れ壁に頭を打ちつけて血を流したその数回を除けば、彼は自らを殺そうと試みなかった。死にたかった。死ねたらどんなによからう。それよりも数等恐ろしい恥辱が迫立てるのだから死をおそれる気持は全然なかった。なぜ死ねなかったのか？ 獄舎の中に、自らを殺すべき道具のなかったことにもよろう。しかし、それ以外に何か内から彼をとめる。はじめ、彼はそれがなんであるかに気づかなかった。ただ狂乱と憤懣ふんまんの中で、たえず発作的に死への誘惑を感じたにもかかわらず、一方彼の気持を自殺のほうへ向けさせたがらないものがあるのを漠然ぼくぜんと感じていた。何を忘れたのかはハッキリしないながら、とにかく何か忘れものをしたような気がする。ちようどそんなぐあいであった。

許されて自宅に帰り、そこで謹慎きんしんするようになってから、はじめて、彼は、自分がこの一月狂乱にとり紛れて己が畢生の事業たる修史しゅうしのことを忘れ果てていたこと、しかし、表面は忘れていたにもかかわらず、その仕事への無意識の関心が彼を自殺から阻む役目を隠々のうちにつとめていたことに気がついた。

十年前臨終りんじゆうの床で自分の手を取り泣いて遺命いめいした父の慟々たる言葉は、今なお耳底じていにある。しかし、今疾痛惨怛しつづうさんたんを極めた彼の心の中に在あってなお修史の仕事を思い絶たしめないものは、その父の言葉ばかりではなかった。それは何よりも、その仕事そのものであった。仕事の魅力とか仕事への情熱とかいう怡たのしい態ていのものではない。修史という使命の自覚には違ちがいなくともさらに昂然こうぜんとして自らを恃じする自覚ではない。恐ろしく我が強い男だったが、今度のことで、己のいか

にとるに足らぬものだったかをしみじみと考えさせられた。理想の抱負ほうふのと威張いばってみたところで、所詮しよせん己は牛にふみつぶされる道傍みちばたの虫けらのごときものにすぎなかったのだ。「我」はみじめに踏みつぶされたが、修史という仕事の意義は疑えなかった。このような浅ましい身と成り果て、自信も自恃じじも失いつくしたのち、それでもなお世にながらえてこの仕事に従うということは、どう考えても怡たのしいわけはなかった。それはほとんど、いかにいとわしくとも最後までその関係を絶つことの許されない人間同士のような宿命的な因縁いんねんに近いものと、彼自身には感じられた。とにかくこの仕事のために自分はずらを殺すことができぬのだ（それも義務感からではなく、もっと肉体的な、この仕事との繋がりによってである）ということだけはハッキリしてきた。

当座の盲目的な獣の呻うめき苦しみに代わって、より意識的な人間の苦しみが始まった。困ったことに、自殺できないことが明らかになるにつれ、自殺によつてのほかに苦悩と恥辱とから逃れる途みちのないことがますます明らかになってきた。一個の丈夫じやうふたる太史たいし令司馬遷しんばせんは天漢てんかん三年の春に死んだ。そして、そののちに、彼の書残した史をつづける者は、知覚も意識もない一つの書写機械にすぎぬ、——自らそう思い込む以外に途みちはなかった。無理でも、彼はそう思おうとした。修史の仕事は必ず続けられねばならぬ。これは彼にとって絶対であった。修史の仕事のつづけられるためには、いかにたえがたくとも生きながらえねばならぬ。生きながらえるためには、どうしても、完全に身を亡なきものと思ひ込む必要があったのである。

五月ののち、司馬遷はふたたび筆を執った。歎びも昂奮もない・ただ仕事の完成への意志だけに鞭打たれて、傷ついた脚を引摺りながら目的地へ向かう旅人のように、とほとほと稿を継いでいく。もはや太史令の役は免ぜられていた。些か後悔した武帝が、しばらく後に彼を中書令に取立てたが、官職の黜陟のごときは、彼にとつてもうなんの意味もない。

以前の論客司馬遷は、一切口を開かずなつた。笑うことも怒ることもない。しかし、けつして悄然たる姿ではなかった。むしろ、何か悪霊にでも取り憑かれていようなすさまじさを、人々は緘黙せる彼の風貌の中に見て取った。夜眠る時間をも惜しんで彼は仕事をつづけた。一刻も早く仕事を完成し、そのうえで早く自殺の自由を得たいとあせっているもののように、家人らには思われた。

凄惨な努力を一年ばかり続けたのち、ようやく、生きることの歎びを失いつくしたのちもなお表現することの歎びだけは生残りうるものだということを、彼は発見した。しかし、そのころになつてもまだ、彼の完全な沈黙は破られなかつたし、風貌の中のすさまじさも全然和らげられはしない。稿をつづけていくうちに、宦者とか閹奴とかいう文字を書かなければならぬところに来ると、彼は覚えす呻き声を發した。独り居室にいるときでも、夜、牀上に横になつたときでも、ふとこの屈辱の思いが萌してくると、たちまちカーッと、焼鑊をあてられるような熱い疼くものが全身を駆けめぐる。彼は思わず飛上り、奇声を發し、呻きつつ四辺を歩きまわり、さしてしばらくしてから齒をくいしばつて己を落ちつけようと努めるのである。

三

乱軍の中に氣を失つた李陵が獸脂を灯し獸糞を焚いた単于の帳房の中で目を覚ましたとき、咄嗟に彼は心を決めた。自ら首刎ねて辱しめを免れるか、それとも今一応は敵に従つておいてそのうちに機を見て脱走する——敗軍の責を償うに足る手柄を土産として——か、この二つのほかに途はないのだが、李陵は、後者を選ぶことに心を決めたのである。

単于是手ずから李陵の縄を解いた。その後の待遇も鄭重を極めた。且鞮侯単于とて先代の匈奴單于の弟だが、骨髄の逞しい巨眼赭髯の中年の偉丈夫である。数代の単于に従つて漢と戦つてはきたが、まだ李陵ほどの手強い敵に遭つたことはないと正直に語り、陵の祖父李広の名を引合いに出して陵の善戦を讃めた。虎を格殺したり岩に矢を立てたりした飛將軍李広の驍名は今もなお胡地にまで語り伝えられている。陵が厚遇を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も強かつたからである。食を頒けるときも強壯者が美味をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴のふうであつた。ここでは、強き者が辱しめられることはけつしてない。降將李陵は一つの穹廬と数十人の侍者とを与えられ賓客の礼をもつて遇せられた。

李陵にとつて奇異な生活が始まつた。家は絨帳穹廬、食物は羶肉、飲物は酪漿と獸乳と乳醋酒。着物は狼や羊や熊の皮を綴り合わせた旃裘。牧畜と狩獵と寇掠と、このほか彼らの生活はない。一望際涯のない高原にも、しかし、河

や湖や山々による境界があつて、單于直轄地のほかは左賢王右賢王左谷蠡王右谷蠡王以下の諸王侯の領地に分けられており、牧民の移住はおのおのその境界の中に限られているのである。城郭もなければ田畑もない国。村落はあつても、それが季節に従い水草を逐つて土地を変える。

李陵には土地は与えられない。單于麾下の諸将とともにいつも單于に従つていた。隙があつたら單于の首でも、と李陵は狙つていたが、容易に機会が来ない。たとい、單于を討果たしたとしても、その首を持って脱出することは、非常な機会に恵まれないかぎり、まず不可能であつた。胡地にあつて單于と刺違えたのでは、匈奴は己の不名誉を有耶無耶のうちに葬ってしまうこと必^{きよう}定^{てい}ゆえ、おそらく漢に聞こえることはあるまい。李陵は辛抱強く、その不可能とも思われる機会の到来を待った。

單于の幕下には、李陵のほかにも漢の降人が幾人かいた。その中の一人、衛律という男は軍人ではなかったが、丁靈王の位を貰つて最も重く單于に用いられている。その父は胡人だが、故あつて衛律は漢の都で生まれ成長した。武帝に仕えていたのだが、先年協律都尉李延年の事に坐するのを懼れて、亡げて匈奴に歸したのである。血が血だけに胡風になじむことも速く、相当の才物でもあり、常に且鞮侯單于の帷幄に参じてすべての画策に与かつていた。李陵はこの衛律を始め、漢人の降つて匈奴の中にあるものと、ほとんど口をきかなかつた。彼の頭の中にある計画について事とともにすべき人物がいなと思われたのである。そういえば、他の漢人同士の間でもまた、互いに妙に氣まずいものを感じるらしく、相互

に親しく交わることがないようであつた。

一度單于は李陵を呼んで軍略上の示教を乞うたことがある。それは東胡に対しての戦いだったので、陵は快く己が意見を述べた。次に單于が同じような相談を持ちかけたとき、それは漢軍に対する策戦についてであつた。李陵はハッキリと嫌な表情をしたまま口を開こうとしなかつた。單于も強いて返答を求めようとしなかつた。それからだいぶ久しくたつたころ、代・上郡を寇掠する軍隊の一将として南行することを求められた。このときは、漢に対する戦いには出られない旨を言つてキツパリ断わつた。爾後、單于は陵にふたたびこうした要求をしなくなつた。待遇は依然として変わらない。他に利用する目的はなく、ただ士を遇するために士を遇しているのだとしかわれぬ。とにかくこの單于は男だと李陵は感じた。

單于の長子・左賢王が妙に李陵に好意を示しはじめた。好意というより尊敬といったほうが近い。二十歳を越したばかりの・粗野ではあるが勇氣のある真面目な青年である。強き者への讚美が、実に純粹で強烈なのだ。初め李陵のところへ来て騎射を教えてくれという。騎射といっても騎のほうは陵に劣らぬほど巧い。ことに、裸馬を驅る技術に至つては遙かに陵を凌いでいるので、李陵はただ射だけを教えることにした。左賢王は、熱心な弟子となつた。陵の祖父李広の射における入神の技などを語るとき、蕃族の青年は眸をかがやかせて熱心に聞入るのである。よく二人して狩獵に出かけた。ほんの僅かの供廻りを連れただけで二人は縦横に曠野を疾駆しては狐や狼や羚羊や鵬や雉子などを射た。あるときな

ど夕暮れ近くなつて矢も尽きかけた二人が——二人の馬は供の者を遙かに駢抜いていたので——一群の狼に囲まれたことがある。馬に鞭うち全速力で狼群の中を駢抜けて逃れたが、そのとき、李陵の馬の尻に飛びかかった一匹を、後ろに駢けていた青年左賢王が彎刀をもって見事に胴斬りにした。あとで調べると二人の馬は狼どもに噛み裂かれて血だらけになっていた。そういう一日ののち、夜、天幕の中で今日の獲物を羹の中にぶちこんでフウフウ吹きながら嘍るとき、李陵は火影に顔を火照らせた若い蕃王の息子に、ふと友情のようなものをさえ感ずることがあった。

天漢三年の秋に匈奴がまたもや雁門を犯した。これに酬いて、翌四年、漢は貳師將軍李広利に騎六万歩七万の大軍を授けて朔方を出でしめ、歩卒一万を率いた強弩都尉路博徳にこれを援けしめた。ひいて因杆將軍公孫敖は騎一万歩三万をもつて雁門を、游擊將軍韓説は歩三万をもつて五原を、それぞれ進発する。近来にない大北伐である。單于是この報に接するや、ただちに婦女、老幼、畜群、資財の類をことごとく余吾水（ケルレン河）北方の地に移し、自ら十万の精騎を率いて李広利・路博徳の軍を水南の大草原に邀え撃った。連戦十余日。漢軍はついに退くのをやむなきに至った。李陵に師事する若き左賢王は、別に一隊を率いて東方に向かい因杆將軍を迎えてさんざんにこれを破った。漢軍の左翼たる韓説の軍もまた得るところなくして兵を引いた。北征は完全な失敗である。李陵は例によって漢との戦いには陣頭に現われず、水北に退いていたが、左賢王の戦績をひそかに氣遣っている

己を発見して愕然とした。もちろん、全体としては漢軍の成功と匈奴の敗戦とを望んでいたには違いないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じていたらしい。李陵はこれに氣がついて激しく己を責めた。

その左賢王に打破られた公孫敖が都に帰り、士卒を多く失つて功がなかったとの廉で牢に繋がれたとき、妙な弁解をした。敵の捕虜が、匈奴軍の強いのは、漢から降った李將軍が常々兵を練り軍略を授けてもつて漢軍に備えさせているからだと言ったというのである。だからといって自軍が敗れたことの弁解にはならないから、もちろん、因杆將軍の罪は許さねなかつたが、これを聞いた武帝が、李陵に対し激怒したことは言うまでもない。一度許されて家に戻っていた陵の一族はふたたび獄に収められ、今度は、陵の老母から妻・子・弟に至るまでことごとく殺された。輕薄なる世人の常とて、當時隴西（李陵の家は隴西の出である）の士大夫ら皆李家を出したことを恥としたと記されている。

この知らせが李陵の耳に入つたのは半年ほど後のこと、辺境から拉致された一漢卒の口からである。それを聞いたとき、李陵は立上がつてその男の胸倉をつかみ、荒々しくゆすぶりながら、事の真偽を今一度たしかめた。たしかにまちがいのないことを知ると、彼は齒をくい縛り、思わず力を両手にこめた。男は身をもがいて、苦悶の呻きを洩らした。陵の手が無意識のうちにその男の咽喉を扼していたのである。陵が手を離すと、男はバツタリ地に倒れた。その姿に目もやらず、陵は帳房の外へ飛出した。

めちやくちやに彼は野を歩いた。激しい憤りが頭の中で渦

を巻いた。老母や幼児のことを考えると心は灼けるようであったが、涙は一滴も出ない。あまりに強い怒りは涙を涸渇させてしまうのであろう。

今度の場合には限らぬ。今まで我が一家はそもそも漢から、どのような扱いを受けてきたか？ 彼は祖父の李広の最期を思った。（陵の父、当戸は、彼が生まれる数か月前に死んだ。陵はいわゆる、遺腹の児である。だから、少年時代までの彼を教育し鍛えあげたのは、有名なこの祖父であった。）名将李広は数次の北征に大功を樹てながら、君側の姦佞に妨げられて何一つ恩賞にあずからなかった。部下の諸将がつぎつぎに爵位封侯を得て行くのに、廉潔な將軍だけは封侯はおろか、終始変わらぬ清貧に甘んじなければならなかった。最後に彼は大將軍衛青と衝突した。さすがに衛青にはこの老将をいたわる気持はあったのだが、その幕下の一軍吏が虎の威を借りて李広を辱しめた。憤激した老名將はすぐその場で——陣営の中で自ら首刎ねたのである。祖父の死を聞いて声をあげてない少年の日の自分を、陵はいまだにハッキリと憶えている。……

陵の叔父（李広の次男）李敢の最後はどうか。彼は父將軍の惨めな死について衛青を怨み、自ら大將軍の邸に赴いてこれを辱しめた。大將軍の甥にあたる嫖騎將軍霍去病がそれを憤って、甘泉宮の獵のときに李敢を射殺した。武帝はそれを知りながら、嫖騎將軍をかばわんがために、李敢は鹿の角に触れて死んだと発表させたのだ。……

司馬遷の場合と違って、李陵のほうは簡単であった。憤怒がすべてであった。（無理でも、もう少し早くかねての計画

——單于の首でも持って胡地を脱するという——を実行すればよかったという悔いを除いては、ただそれをいかにして現わすかが問題であるにすぎない。彼は先刻の男の言葉「胡地にあつて李將軍が兵を教え漢に備えていると聞いて陛下が激怒され云々」を思出した。ようやく思い当たったのである。もちろん彼自身にはそんな覚えはないが、同じ漢の降將に李緒という者がある。元、塞外都尉として奚侯城を守っていた男だが、これが匈奴に降ってから常に胡軍に軍略を授け兵を練っている。現に半年前の軍にも、單于に従って、（問題の公孫敖の軍とではないが）漢軍と戦っている。これだと李陵は思った。同じ李將軍で、李緒とまちがえられたに違いないのである。

その晩、彼は單身、李緒の帳幕へと赴いた。一言も言わぬ、一言も言わせぬ。ただの一刻しで李緒は斃れた。

翌朝李陵は單于の前に出て事情を打明けた。心配は要らぬと單于は言う。だが母の大閼氏が少々うるさいから——というのは、相当の老齡でありながら、單于の母は李緒と醜關係があつたらしい。單于はそれを承知していたのである。匈奴の風習によれば、父が死ぬと、長子たる者が、亡父の妻妾のすべてをそのまま引きついだ己が妻妾とするのだが、さすがに生母だけはこの中にはいらない。生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼らでも有っているのである——今しばらく北方へ隠れていてもらいたい、ほとぼりがさめたところに迎えを遣るから、とつけ加えた。その言葉に従って、李陵は一時従者どもをつれ、西北の兜銜山（額林達班嶺）の麓に身を避けた。

まもなく問題の大閼氏が病死し、単于の庭に呼戻されたとき、李陵は人間が変わったように見えた。というのは、今まで漢に対する軍略にだけは絶対に与らなかつた彼が、自ら進んでその相談に乗ろうと言出したからである。単于はこの変化を見て大いに喜んだ。彼は陵を右校王に任じ、己が娘の一人をめあわせた。娘を妻にという話は以前にもあつたのだが、今まで断わりつけてきた。それを今度は躊躇なく妻としたのである。ちょうど酒泉張掖の辺を寇掠すべく南に出て行く一軍があり、陵は自ら請うてその軍に従つた。しかし、西南へと取つた進路がたまたま浚稽山の麓を過つたとき、さすがに陵の心は曇つた。かつてこの地で己に従つて死戦した部下どものことを考え、彼らの骨が埋められ彼らの血の染み込んだその砂の上を歩きながら、今の己が身の上を思うと、彼はもはや南行して漢兵と闘う勇気を失つた。病と称して彼は独り北方へ馬を返した。

翌、太始元年、且鞮侯单于が死んで、陵と親しかつた左賢王が後を嗣いだ。狐鹿姑单于というのがこれである。

匈奴の右校王たる李陵の心はいまだにハッキリしない。母妻子を族滅された怨みは骨髓に徹しているものの、自ら兵を率いて漢と戦うことができないのは、先ごろの経験で明らかである。ふたたび漢の地を踏むまいとは誓つたが、この匈奴の俗に化して終生安んじていられるかどうかは、新单于への友情をもつてしても、まださすがに自信がない。考えることの嫌いな彼は、イライラしてくると、いつも独り駿馬を駆つて曠野に飛び出す。秋天一碧の下、嚶々と蹄の音を響かせ

て草原となく丘陵となく狂気のように馬を駆けさせる。何十里かぶつとばした後、馬も人もようやく疲れてくると、高原の中の小川を求めてその澍に下り、馬に飲かう。それから己は草の上に仰向けにねころんで快い疲労感にウットリと見上げる碧落の潔さ、高さ、広さ。ああ我もと天地間の一粒子のみ、なんぞまた漢と胡とあらんやとふとそんな氣のすることもある。一しきり休むとまた馬に跨がり、がむしやりに駆け出す。終日乗り疲れ黄雲が落暉に曝ずるころになつてようやく彼は幕営に戻る。疲労だけが彼のただ一つの救いなのである。

司馬遷が陵のために弁じて罪をえたことを伝える者があつた。李陵は別にありがたいとも氣の毒だとも思わなかつた。司馬遷とは互いに顔は知つているし挨拶をしたことはあつても、特に交を結んだというほどの間柄ではなかつた。むしろ、厭に議論ばかりしてうるさいやつだからにしか感じていなかったのである。それに現在の李陵は、他人の不幸を実感するには、あまりに自分一個の苦しみと闘うのに懸命であつた。よけいな世話とまでは感じなかつたにしても、特に済まないと感じることがなかつたのは事実である。

初め一概に野卑滑稽としか映らなかつた胡地の風俗が、しかし、その地の實際の風土・氣候等を背景として考えてみるとけつして野卑でも不合理でもないことが、しだいに李陵にのみこめてきた。厚い皮革製の胡服でなければ朔北の冬は凌げないし、肉食でなければ胡地の寒冷に堪えるだけの精力を貯えることができない。固定した家を築かないのも彼らの

生活形態から来た必然で、頭から低級と貶し去るのは当たらない。漢人のふうをあくまで保とうとするなら、胡地の自然の中の生活は一日といえども続けられないのである。

かつて先代の且鞮侯单于の言った言葉を李陵は憶えている。漢の人間が二言めには、己が国を礼儀の国といい、匈奴の行ないをもつて禽獣に近いと看做すことを難じて、单于是言った。漢人のいう礼儀とは何ぞ？ 醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾の謂ではないか。利を好み人を嫉むこと、漢人と胡人といずれかはなはだしき？ 色に耽り財を貪ること、またいずれかはなはだしき？ 表べを剥ぎ去れば畢竟なんらの違いはないはず。ただ漢人はこれをごまかし飾ることを知り、我々はそれを知らぬだけだ、と。漢初以来の骨肉相喰む内乱や功臣連の排斥擠陥の跡を例に引いてこう言われたとき、李陵はほとんど返す言葉に窮した。実際、武人たる彼は今までにも、煩瑣な礼のための礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあったからである。たしかに、胡俗の粗野な正直さのほうが、美名の影に隠れた漢人の陰険さより遙かに好ましい場合がしばしばあると思った。諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかかるのは、あまりにも漢人的な偏見ではないかと、しだいに李陵にはそんな気がしてくる。たとえば今まで人間には名のほかに字がなければならぬものと、ゆえもなく信じ切っていたが、考えてみれば字が絶対に必要だという理由はどこにもないのであった。

彼の妻はすこぶる大人しい女だった。いまだに主人の前に出るとおすおすしてろくに口も利けない。しかし、彼らの間にできた男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチヨチと李

陵の膝に匍上がつて来る。その児の顔に見入りながら、数年前長安に残してきた——そして結局母や祖母とともに殺されてしまった——子供の倂をふと思いうかべて李陵は我しらず憮然とするのであった。

陵が匈奴に降るよりも早く、ちょうどその一年前から、漢の中郎将蘇武が胡地に引留められていた。

元来蘇武は平和の使節として捕虜交換のために遣わされたのである。ところが、その副使某がたまたま匈奴の内紛に係したために、使節団全員が囚えられることになってしまった。单于是彼らを殺そうとはしないで、死をもつて脅かしてこれを降らしめた。ただ蘇武一人は降服を肯じないばかりか、辱しめを避けようと自ら剣を取って己が胸を貫いた。昏倒した蘇武に対する胡醫の手当てというのがすこぶる変わっていた。地を掘って坎をつくり燭火を入れて、その上に傷者を寝かせその背中を踏んで血を出させたと漢書には誌されている。この荒療治のおかげで、不幸にも蘇武は半日昏絶したのちにまた息を吹返した。且鞮侯单于是すっかり彼に惚れ込んだ。数旬ののちようやく蘇武の身体が恢復すると、例の近臣衛律をやつてまた熱心に降をすすめさせた。衛律は蘇武が鉄火の罵詈に遭い、すっかり恥をかって手を引いた。その後蘇武が窖の中に幽閉されたとき旃毛を雪に和して喰いもつて飢えを凌いだ話や、ついに北海（バイカル湖）のほとり人なき所に徙されて牡羊が乳を出さば帰るを許さんと言われた話は、持節十九年の彼の名とともに、あまりにも有名だから、ここには述べない。とにかく、李陵が悶々の余生を胡地

に埋めようとよく決心せざるを得なくなつたころ、蘇武は、すでに久しく北海のほとりで独り羊を牧していたのである。

李陵にとって蘇武は二十年来の友であつた。かつて時を同じうして侍中を勤めていたこともある。片意地でさばけないところはあるにせよ、確かにまれに見る硬骨の士であることは疑いないと陵は思っていた。天漢元年に蘇武が北へ立つてからまもなく、武の老母が病死したときも、陵は陽陵までその葬を送った。蘇武の妻が良人のふたたび帰る見込みなしと知って、去つて他家に嫁した噂を聞いたのは、陵の北征出發直前のことであつた。そのとき、陵は友のためにその妻の浮薄をいたく憤つた。

しかし、はからずも自分が匈奴に降るようになってからのちは、もはや蘇武に会いたいとは思わなかつた。武が遙か北方に遷されていて顔を合わせずに済むことをむしろ助かつたと感じていた。ことに、己の家族が戮せられてふたたび漢に戻る氣持を失つてからは、いっそうこの「漢節を持した牧羊者」との面接を避けたかつた。

狐鹿姑単于が父の後を嗣いでから数年後、一時蘇武が生死不明との噂が伝わつた。父単于がついに降服させることのできなかつたこの不屈の漢使の存在を思出した狐鹿姑単于は、蘇武の安否を確かめるとともに、もし健在ならば今一度降服を勧告するよう、李陵に頼んだ。陵が武の友人であることを聞いていたのである。やむを得ず陵は北へ向かつた。

姑且水を北に溯り郅居水との合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。まだ所々に雪の残っている川岸を進むこと

数日、ようやく北海の碧い水が森と野との向こうに見え出したころ、この地方の住民なる丁靈族の案内人は李陵の一行を一軒の哀れな丸太小舎へと導いた。小舎の住人が珍しい人声に驚かされて、弓矢を手に表へ出て来た、頭から毛皮を被つた鬚ぼうぼうの熊のような山男の顔の中に、李陵がかつての移中厰監蘇子卿の倂を見出してからも、先方がこの胡服の大官を前の騎都尉李少卿と認めるまでにはなおしばらくの間が必要であつた。蘇武のほうでは陵が匈奴に事えていることも全然聞いていなかったのである。

感動が、陵の内に在つて今まで武との会見を避けさせていたものを一瞬圧倒し去つた。二人とも初めほとんどものが言えなかつた。

陵の供廻りどもの穹廬がいくつか、あたりに組立てられ、無人の境が急に賑やかになつた。用意してきた酒食がささく小舎に運び入れられ、夜は珍しい歓笑の聲が森の鳥獸を驚かせた。滞在は数日に亘つた。

己が胡服を纏うに至つた事情を話すことは、さすがに辛かつた。しかし、李陵は少しも弁解の調子を交えずに事實だけを語つた。蘇武がさりげなく語るその数年間の生活はまったく慘憺たるものであつたらしい。何年か以前に匈奴の於軒王が獵をするとしてまたまここを過ぎ蘇武に同情して、三年間つづけて衣服食糧等を給してくれたが、その於軒王の死後は、凍てついた大地から野鼠を掘出して、飢えを凌がなければならぬ始末だと言う。彼の生死不明の噂は彼の養つていた畜群が剽盗どものために一匹残らずさらわれてしまったことの訛伝らしい。陵は蘇武の母の死んだことだけは告げたが、妻

が子を棄てて他家へ行つたことはさすがに言えなかった。

この男は何を目あてに生きているのかと李陵は怪しんだ。いまだに漢に帰れる日を待ち望んでいるのだろうか。蘇武の口うらから察すれば、いまさらそんな期待は少しももっていないようである。それではなんのためにこうした惨憺たる日々をたえ忍んでいるのか？ 單于に降服を申出れば重く用いられることは請合いだが、それをする蘇武でないことは初めから分り切っている。陵の怪しむのは、なぜ早く自ら生命を絶たないのかという意味であつた。李陵自身が希望のない生活を自らの手で断ち切りえないのは、いつのまにかこの地に根を下して了つた数々の恩愛や義理のためであり、またいまさら死んでも格別漢のために義を立てることにものならないからである。蘇武の場合は違ふ。彼にはこの地での係累もない。漢朝に対する忠信という点から考えるなら、いつまでも節旄を持して曠野に飢えるのと、ただちに節旄を焼いてのち自ら首刎ねるのとの間に、別に差異はなさそうに思われる。はじめ捕えられたとき、いきなり自分の胸を刺した蘇武に、今となって急に死を恐れる心が萌したとは考えられない。李陵は、若いころの蘇武の片意地を——滑稽なくらい強情な瘦我慢を思出した。單于是榮華を餌に極度の困窮の中から蘇武を釣ろうと試みる。餌につられるのはもとより、苦難に堪ええずして自ら殺すこともまた、單于に（あるいはそれによって象徴される運命に）負けることになる。蘇武はそう考えているのではなからうか。運命と意地の張合いをしているような蘇武の姿が、しかし、李陵には滑稽や笑止には見えなかった。想像を絶した困苦・欠乏・酷寒・孤独を、（しかもこれから死に

至るまでの長い間を）平然と笑殺していかせるものが、意地だとすれば、この意地こそは誠に凄じくも壮大なものと言わねばならぬ。昔の多少は大人げなく見えた蘇武の瘦我慢が、かかる大我慢にまで成長しているのを見て李陵は驚嘆した。しかもこの男は自分の行ないが漢にまで知られることを予期していない。自分がふたたび漢に迎えられることはもとより、自分がかかる無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴の單于にさえ伝えてくれる人間の出て来ることをも期待していなかった。誰にもみとられずに独り死んでいくに違いないその最後の日に、自ら顧みて最後まで運命を笑殺しえたことに満足して死んでいこうというのだ。誰一人己が事蹟を知ってくれなくともさしつかえないというのである。李陵は、かつて先代單于の首を狙いながら、その目的を果たすとも、自分がそれをもって匈奴の地を脱走しえなければ、せっかくの行為が空しく、漢にまで聞こえないであろうことを恐れて、ついに決行の機を見出しえなかった。人に知られざることを憂えぬ蘇武を前にして、彼はひそかに冷汗の出る思いであつた。

最初の感動が過ぎ、二日三日とたつうちに、李陵の中にやはり一種のこだわりができてくるのをどうすることもできなかった。何を語るにつけても、己の過去と蘇武のそれとの対比がいちいちひっかかってくる。蘇武は義人、自分は売国奴と、それほどハッキリ考えはしないけれども、森と野と水との沈黙によって多年の間鍛え上げられた蘇武の厳しさの前には己の行為に対する唯一の弁明であつた今までのわが苦悩の

ごときは一溜りもなく圧倒されるのを感じないわけにいかない。それに、気のせい、日にちが立つにつれ、蘇武の己に対する態度の中に、何か富者が貧者に対するときのような——己の優越を知ったうえで相手に寛大であろうとする者の態度を感じはじめた。どことハッキリはいえないが、どうかした拍子にひよいとそういうものの感じられることがある。縋縋をまとった蘇武の目の中に、ときとして浮かぶかな憐愍の色を、豪奢な貂裘をまとった右校王李陵はなによりも恐れた。

十日ばかり滞在したのち、李陵は旧友に別れて、悄然と南へ去った。食糧衣服の類は充分に森の丸木小舎に残してきた。

李陵は単于からの依頼たる降服勧告についてはとうとう口を切らなかつた。蘇武の答えは問うまでもなく明らかであるものを、何もいまさらそんな勧告によって蘇武をも自分をも辱めるには当たらないと思つたからである。

南に帰つてからも、蘇武の存在は一日も彼の頭から去らなかつた。離れて考えるとき、蘇武の姿はかえっていつそうきびしく彼の前に聳えているように思われる。

李陵自身、匈奴への降服という己の行為をよしとしているわけではないが、自分の故国につくした跡と、それに対して故国の己に酬いたところとを考えるなら、いかに無情な批判者といえども、なお、その「やむを得なかつた」ことを認めるだろうとは信じていた。ところが、ここに一人の男があつて、いかに「やむを得ない」と思われる事情を前にしても、断じて、自らにそれは「やむを得ぬのだ」という考えかたを許そうとしないのである。

飢餓も寒苦も孤独の苦しみも、祖国の冷淡も、己の苦節がついに何人にも知られないだろうというほとんどの確定的な事実も、この男にとって、平生の節義を改めなければならぬほどのやむを得ぬ事情ではないのだ。

蘇武の存在は彼にとって、崇高な訓誡でもあり、いらだたしい悪夢でもあつた。ときどき彼は人を遣わして蘇武の安否を問わせ、食品、牛羊、絨氈を贈った。蘇武をみたい気持と避けたい気持とが彼の中で常に闘つていた。

数年後、今一度李陵は北海のほとりの丸木小舎を訪ねた。

そのとき途中で雲中の北方を成る衛兵らに会い、彼らの口から、近ごろ漢の辺境では太守以下吏民が皆白服をつけていることを聞いた。人民がごとく服を白くしているとあれば天子の喪に相違ない。李陵は武帝の崩じたのを知った。北海の畔に到つてこのことを告げたとき、蘇武は南に向かつて号哭した。慟哭数日、ついに血を嘔くに至つた。その有様を見ながら、李陵はしだいに暗く沈んだ気持になつていった。彼はもちろん蘇武の慟哭の真摯さを疑うものではない。その純粹な烈しい悲嘆には心を動かされずにはいられない。だが、自分には今一滴の涙も泛んでこないのである。蘇武は、李陵のように一族を戮せられることこそなかつたが、それでも彼の兄は天子の行列にさいしてちよつとした交通事故を起こしたために、また、彼の弟はある犯罪者を捕ええなかつたことのために、ともに責を負うて自殺させられている。どう考えても漢の朝から厚遇されていたとは称しがたいのである。それを知つてのうえで、今日の前に蘇武の純粹な痛哭を見てい

るうちに、以前にはただ蘇武の強烈な意地とのみ見えたものの底に、実は、譬えようもなく清冽な純粹な漢の国土への愛情（それは義とか節とかいう外から押しつけられたものではなく、抑えようとして抑えられぬ、こんこんと常に湧出る最も親身な自然な愛情）が湛えられていることを、李陵ははじめて発見した。

李陵は己と友とを隔てる根本的なものにぶつかっていやでも己自身に対する暗い懷疑に追いやられざるをえないのである。

蘇武の所から南へ帰って来ると、ちょうど、漢からの使者が到着したところであつた。武帝の死と昭帝の即位とを報じてかたがた自分の友好関係を——常に一年とは続いたことのない友好関係だったが——結ぶための平和の使節である。その使いとしてやって来たのが、はからずも李陵の故人・隴西の任立政ら三人であつた。

その年の二月武帝が崩じて、僅か八歳の太子弗陵が位を嗣ぐや、遺詔によって侍中奉車都尉霍光が大司馬大將軍として政を輔けることになった。霍光はもと、李陵と親しかったし、左將軍となつた上官桀もまた陵の故人であつた。この二人の間に陵を呼返そうとの相談ができ上がったのである。今度の使いにわざわざ陵の昔の友人が選ばれたのはそのためであつた。

単于の前で使者の表向きの用が済むと、盛んな酒宴が張られる。いつもは衛律がそうした場合の接待役を引受けるのだが、今度は李陵の友人が来た場合とて彼も引張り出されて宴

につらなつた。任立政は陵を見たが、匈奴の大官連の並んでいる前で、漢に帰れとは言えない。席を隔てて李陵を見ては目配せをし、しばしば己の刀環を撫でて暗にその意を伝えようとしたり。陵はそれを見た。先方の伝えんとするところもほぼ察した。しかし、いかなるしぐさをもって応えるべきかを知らない。

公式の宴が終わつた後で、李陵・衛律らばかりが残つて牛酒と博戯とをもつて漢使をもてなした。そのとき任立政が陵に向かつて言う。漢ではいまや大赦令が降り万民は太平の仁政を楽しんでいる。新帝はいまだ幼少のこととて君が故旧たる霍子孟・上官少叔が主上を輔けて天下の事をを用いることになつたと。立政は、衛律をもつて完全に胡人になり切つたものと見做して——事実それに違いなかつたが——その前では明らさまに陵に説くのを憚つた。ただ霍光と上官桀との名を挙げて陵の心を惹こうとしたのである。陵は黙して答えなない。しばらく立政を熟視してから、己が髪を撫でた。その髪も椎結とてすでに中国のふうではない。ややあつて衛律が服を更えるために座を退いた。初めて隔てのない調子で立政が陵の字を呼んだ。少卿よ、多年の苦しみはいかばかりだったか。霍子孟と上官少叔からよろしくとのことであつたと。その二人の安否を問返す陵のよそよそしい言葉におっかぶせるようにして立政がふたたび言つた。少卿よ、帰ってくれ。富貴などは言うに足りぬではないか。どうか何もいわずに帰ってくれ。蘇武の所から戻つたばかりのこととて李陵も友の切なる言葉に心が動かぬではない。しかし、考えてみるまでもなく、それはもはやどうにもならぬことであつた。「帰るのは易

い。だが、また辱しめを見るだけのことはないか？
如何？」言葉半ばにして衛律が座に還ってきた。二人は口を噤んだ。

会が散じて別れ去るとき、任立政はさりげなく陵のそばに寄ると、低声で、ついに帰るに意なきやを今一度尋ねた。陵は頭を横にふった。丈夫ふたたび辱めらるるあたわずと答えた。その言葉がひどく元気のなかったのは、衛律に聞こえることを惧れたためではない。

後五年、昭帝の始元六年の夏、このまま人に知られず北方に窮死すると思われた蘇武が偶然にも漢に帰れることになった。漢の天子が上林苑中で得た雁の足に蘇武の帛書がついていた云々というあの有名な話は、もちろん、蘇武の死を主張する单于を説破するためのためである。十九年前蘇武に従って胡地に來た常恵という者が漢使に遭って蘇武の生存を知らせ、この嘘をもって武を救出するように教えたのであった。さっそく北海の上に使いが飛び、蘇武は单于の庭につれ出された。李陵の心はさすがに動揺した。ふたたび漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉大さに変わりはなく、したがって陵の心の咎たるに変わりはないに違いないが、しかし、天はやっぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。見ていないようである、やっぱり天は見ている。彼は肅然として懼れた。今でも、己の過去をけっして非なりとは思わないけれども、なおここに蘇武という男があつて、無理ではなかったはずの己の過去をも恥ずかしく思わせることを堂々とやってのけ、しかも、その跡が今や天下に顕彰されることになった

という事実は、なんとしても李陵にはこたえた。胸をかきむしられるような女々しい己の氣持が羨望ではないかと、李陵は極度に惧れた。

別れに臨んで李陵は友のために宴を張った。いいたいことは山ほどあつた。しかし結局それは、胡に降ったときの己の志が那邊にあつたかということ。その志を行なう前に故国の一族が戮せられて、もはや帰るに由なくなつた事情とに尽きる。それを言えば愚痴になってしまう。彼は一言もそれについてはいわなかった。ただ、宴酣にして堪えかねて立上がり、舞いかつ歌うた。

徑万里兮度沙幕
爲君將兮奮匈奴
路窮絕兮矢刃摧
士衆滅兮名已隤
老母已死雖欲報恩將安歸

歌っているうちに、声が顫え涙が頬を伝わった。女々しいぞと自ら叱りながら、どうしようもなかった。

蘇武は十九年ぶりで祖国に帰って行った。

司馬遷はその後も孜孜として書き続けた。

この世に生きることをやめた彼は書中の人物としてのみ生きていた。現実の生活ではふたたび開かれることのなくなつた彼の口が、魯仲連の舌端を借りてはじめて烈々と火を噴くのである。あるいは伍子胥となつて己が眼を抉らしめ、ある

いは蘭相如りんしょうじょとなつて秦王しんおうを叱しつし、あるいは太子丹たいしたんとなつて泣いて荆軻けいかを送った。楚その屈原くつげんの憂憤うづぶんを叙して、そのまさに汨羅べきらに身を投ぜんとして作るところの懷沙かいさ之賦のふを長々と引用したとき、司馬遷しまたせんにはその賦がどうしても己自身の作品のごとき気がしてしかたがなかった。

稿を起こしてから十四年、腐刑ふけいの禍わざわいに遭つてから八年。都では巫蠱ふこの獄が起こり戾太子れいたいしの悲劇が行なわれていたころ、父子相伝ふしそでんのこの著述がだいたい最初の構想どおりの通史がひととおりでき上がった。これに増補改刪かいさんすいこう推敲たいかうを加えているうちにまた数年がたった。史記百三十卷、五十二万六千五百字が完成したのは、すでに武帝ぶていの崩御ほうぎよに近いころであつた。

列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱いたとき、司馬遷は几に凭よつたまま惘然ぼうぜんとした。深い溜息ためいきが腹の底から出た。目は庭前の槐樹えんじゆの茂みに向かつてしばらくはいたが、実は何ものをも見ていなかった。うつろな耳で、それでも彼は庭のどこからか聞こえてくる一匹の蟬せみの声に耳をすましているようにみえた。歎ようれしびがあるはずなのに気の抜けた漠然ぼくぜんとした寂しき、不安のほうに先に来た。

完成した著作を官に納め、父の墓前にその報告をするまではそれでもまだ気が張っていたが、それらが終わると急に酷い虚脱ひよういの状態が来た。憑依ひよういの去った巫者ふしやのように、身も心もぐったりとくずおれ、まだ六十を出たばかりの彼が急に十年も年をとったように耄ふけた。武帝の崩御ほうぎよも昭帝の即位もかつてのさきの太史令たいしれい司馬遷しまたせんの脱殻ぬけがらにとってはもはやなんの意味ももたないように見えた。

前に述べた任立政じんりつせいらが胡地こちに李陵りりようを訪ねて、ふたたび都に

戻つて来たころは、司馬遷はすでにこの世に亡なかつた。

蘇武そぶと別れた後の李陵については、何一つ正確な記録は残されていない。元平元年に胡地こちで死んだということのほかは。すでに早く、彼と親しかつた狐鹿姑單于ころくこぜんうは死に、その子壺衍鞬單于うろくけんおの代となつていたが、その即位にからんで左賢王さけんおう、右谷蠡王うくろいおうの内紛があり、閼氏えんしや衛律えいりつらと対抗して李陵も心ならずも、その紛争にまきこまれたらうことは想像に難くない。漢書かんじよの匈奴伝きやうとでんには、その後、李陵の胡地で儲けた子が烏籍都尉うせきとを立てて單于とし、呼韓邪單于こかんやぜんうに対抗してついに失敗した旨が記されている。宣帝せんていの五鳳二年のことだから、李陵が死んでからちょうど十八年めにあたる。李陵の子とあるだけで、名前は記されていない。